

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)

大学院学生研究

2018年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 コミュニティ福祉学 研究科 コミュニティ福祉学 専攻		
研究代表者 (2019年3月現在のものを記入)	在籍課程・学年・学生番号		氏名
	<input checked="" type="checkbox"/> 博士前期課程 2年・17VD003J <input type="checkbox"/> 博士後期課程 年	矢野 康介 印	
指導教員	所属・職名		氏名
	コミュニティ福祉学部・教授		大石 和男 印
自然・人文・社会の別	自然 ・ 人文 ・ <input type="checkbox"/> 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 ・ 共同 名
研究課題	大学生の抑うつ低減に関するプロセスモデルの検討－感覚処理感受性に注目して－		
研究組織 (研究代表者・共同研究者) ※2019年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年		氏名
	コミュニティ福祉学研究科・コミュニティ福祉学専攻・博士課程前期課程2年次		矢野 康介
研究期間	2018 年度		
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 200,000円 / (採択金額) 200,000円		

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

近年、大学生を対象とした健康教育の実施にあたり、個人が持つ感覚処理感受性 (sensory-processing sensitivity; 以下, SPS とする) の程度を事前にアセスメントすることの重要性が指摘されている。しかしながら、従来用いられている SPS の測定尺度は、信頼性および妥当性の問題を抱えており、この課題を解消した新たな測定尺度の作成が望まれている。本研究では、大学生 204 名を対象に自由記述回答式の質問紙調査を実施し、SPS 測定尺度の作成に向けて、SPS が高い個人の心理的特徴を抽出することを目的とした。その結果、既存尺度に含まれる特徴 (例: 情動反応の大きさ) に加えて、既存尺度では測定されていない新たな特徴 (内省的な態度, 情報処理の深さ) が抽出された。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 感覚処理感受性 } { 質的調査 } { 計量テキスト分析 }

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

研究の背景

■ 大学生の健康教育と感覚処理感受性 (SPS)

大学生は学業上の課題に加えて、居住環境や交友関係といった環境的な変化、就職活動をはじめ将来の人生に関わる重要なライフイベントを経験する時期であり、抑うつなど精神的健康の問題を抱えやすいことが指摘されている (Kreß et al., 2015)。そのため、近年では教育機関において抑うつ予防・改善を目的としたアプローチが行われつつある (及川・坂本, 2007; 白石, 2005)。しかしながら、これらの取り組みは十分な成果をもたらしたとは言えない状況にあり、現代の大学生は 1970 年代 (福田・小林, 1973) や 1990 年代 (Sakamoto et al., 1998) の大学生よりも高い抑うつ傾向を示すことが報告されている (塚原, 2011; Yano & Oishi, 2018)。このような現状から、より効果的な健康教育の実施に向けて、対象となる学生の心理的特徴を事前にアセスメントし、それに合わせたプログラムを構成する重要性が指摘されている (嘉瀬ほか, 2017)。

このような事前のアセスメントが必要とされる心理的要因の一つに、感覚処理感受性 (sensory-processing sensitivity; 以下, SPS とする) がある。SPS とは、内的および外的な刺激に対する敏感さ、反応の大きさを表す生得的な特性であり、個人の発達や行動、心身の健康などを予測する要因であることが知られている (Aron & Aron, 1997)。従来の研究において、この SPS はストレスに対する心理的脆弱性として位置づけられてきたものの、近年ではその肯定的側面が知られるようになってきた。すなわち、SPS が高い個人は、その高い感受性ゆえに抑うつなどの心理的不適応に対するリスクを有する一方で、サポート的な環境下では SPS が低い個人よりも良好な健康状態を維持できることが指摘されている (Belsky et al., 2007; Lionetti et al., 2018)。例えば、Pluess and Boniwell (2015) は、心理教育プログラムを実施した際に、SPS が高い個人では介入後に抑うつ傾向の低下を示した一方で、SPS が低い個人では抑うつ傾向の有意な変化が認められなかったことを報告している。これらの知見より、学生を対象とした健康教育プログラムの効果は、SPS の程度に応じて異なることが推察される。したがって、健康教育の実施に先立って対象者の SPS をアセスメントすることは、単に将来的な不適応状態のリスク群を特定するという意義だけでなく、効果的な健康教育プログラムの計画・実施に向けても極めて大きな意義を有すると考えられる (Greven et al., 2019)。

■ 本研究の目的

しかしながら、SPS の測定に用いられる既存の心理尺度 (以下, 既存尺度とする) には、尺度全体の信頼性を低下させるような項目が含まれていることや、内容的妥当性が低いことが指摘されている (Aron et al., 2012)。そのため、より精緻に個人の SPS を測定することができる心理尺度を新たに作成する必要がある。そこで、本研究では新たな SPS 測定尺度の作成に向けて、SPS が高い個人の心理的特徴を抽出することを目的として、2 件の研究 (以下, 研究 1, 2 とする) を行った。ここでは、すでにデータの収集・分析が完了している研究 1 を中心に報告する。

研究 1

■ 目的

研究 1 では、他者評価の視点も踏まえたうえで、SPS が高い個人の心理的特徴を抽出することを目的とした。

■ 方法

調査対象者と調査項目

本調査では、大学生 204 名 (男性 86 名, 女性 118 名; 平均年齢 20.5 ± 2.1 歳) を対象に自由記述回答式の質問紙調査を実施した。質問紙には、「『敏感な人』と聞いて、あなたが思い浮かぶのはどのような人ですか。その内容をできるだけ具体的に書いてください」という教示文を呈示し、回答を求めた。

分析方法

本研究では、収集したデータに対して計量テキスト分析を行った (樋口, 2014)。この分析では、テキストデータを数量的に扱うことで、より客観的な分析が可能となる (大

研究成果の概要 つづき

島ほか, 2006)。テキストデータの分析には, 同じ文章の中で使用される頻度が高い(頻繁に共起される)語同士でクラスターを形成する階層的クラスター分析(Ward法)を用いた。なお計量テキスト分析では, 分析対象となる語が多すぎると解釈が困難となるため(樋口, 2014), 先行研究を参考に(川島ほか, 2009), 出現頻度が最も多かった31語を分析対象とした(最小出現数は43)。

■ 結果と考察

階層的クラスター分析の結果, 6つのクラスターが抽出された。第1クラスターは, 「感じる」「考える」などの語で構成されていた。これらは『物事を深く考える』という意味で使用されていたため, 【内省的な態度】として解釈した。第2クラスターは, 「感情」「変化」などの語で構成されていた。これらは『他者の感情(の変化)に気付き, あるいは想像し, それに共感できる』という意味で使用されていたため, 【情報処理の深さ】として解釈した。第3クラスターは, 「音」「光」などの語で構成されていた。これらは『微細な物理的刺激にも反応する』という意味で使用されていたため, 【物理的刺激への敏感さ】として解釈した。第4クラスターは, 「他者」「敏感」といった語で構成されていた。これらは『周囲の人間が自分のことをどう思っているか気にする』という意味で使用されていたため, 【他者評価への敏感さ】として解釈した。第5クラスターは, 「苦手」「過剰」などの語で構成されていた。これらは『種々の刺激を過剰に受けることで, 不快感が高まりやすい』という意味で使用されていたため, 【過剰な刺激を受けやすいこと】として解釈した。最後に, 第6クラスターは, 「聞く」「話」などの語で構成されていた。これらは『他者の話などを聞いて, 自分自身の感情が動きやすい』という意味で使用されていたため, 【情動反応の大きさ】として解釈した。

研究1の結果から, 高いSPSを持つ個人の心理的特徴として, 以上のような6つの要因が抽出された。これらのうち, 【物理的刺激への敏感さ】【他者評価への敏感さ】【過剰な刺激を受けやすいこと】【情動反応の大きさ】という4つの特徴は, 既存尺度の内容とも対応している一方で, 【内省的な態度】【情報処理の深さ】という2つの特徴は, 既存尺度の内容には含まれない要因を表す特徴であった。

研究 2**■ 目的**

研究2においては, 上記のSPSが高い個人の心理的特徴が表出される詳細な状況, そのときの行動について明らかにすることを目的とした。

■ 方法**調査対象者と調査項目**

Aron (1996) が示すチェックリストに準拠して抽出された, SPSが高いと考えられる大学生・大学院生4名(男性2名, 女性2名; 平均年齢 24.5 ± 3.3 歳)に対して半構造化面接法によるインタビュー調査を実施した。インタビューでは, 研究1で抽出された6つの特徴に沿った質問を用意した(例: あなたが楽しい[悲しい]と感じる場面について教えてください)。

分析方法

研究2では, インタビュー調査で得られたデータをテキスト化した後に, KJ法(川喜田, 1995)を用いる。すなわち, テキスト化されたデータを意味単位ごとに区切り, より具体的な低次のカテゴリーから, より抽象的な高次のカテゴリーにまとめていくことで, SPSが高い個人におけるより詳細な心理的特徴の抽出を試みる分析である。

今後の課題

SPSが高い個人の心理的特徴を目的として2件の研究を行った。研究1の結果, SPSを測定する既存尺度には反映されていない特徴が抽出された一方で, 研究2では十分なサンプル数が得られず, データの分析を行うに至っていないのが現状である。そのため, 今後は追加調査を行い, 十分なサンプル数を確保したうえで, 研究2のデータ分析を進めていく必要がある。

※この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は, その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて提出してください。)

- ① 雑誌論文 (著者名、論文タイトル、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ② 図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③ シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④ その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① なし

② なし

③ なし

④ ポスター発表 1 件

○ **Yano, K.**, Kimura, S., & Oishi, K. (2019). Exploratory study on Characteristics of “Highly Sensitive Person” among Japanese University Students. *Asian Conference on Psychology and Behavioral Sciences 2019*, 50277, Tokyo, Japan (March 21th, 2019).